11月1日　諸聖人　マタイ5章1～12節ａ　イエスの姿を表すあなたがたは幸い

今週は本来ならば年間第３１主日ですが、諸聖人の祭日と重なるため、そちらが優先してお祝いされます。２０２０年以来６年ぶりのことになります。ちょうどコロナの年だったので公開ミサもなかったかもしれませんし、不安な思いのうちに過ごされていた方々も多かったことでしょう。そんな時代のわたしたちに、イエスの「あなたがたは幸い」という言葉はどのように響いたのでしょうか。

イエスの宣教の初めは「悔い改めよ、天の国は近づいた」という言葉で表されています。しかし、具体的な教えの初めはマタイ福音書では「山上の説教」と言われる説教で、その冒頭に今日の福音で引用されている「八つの幸い」と呼ばれている教えがあります。年配の方は「真福八端」というほうが、なじみがあるかもしれません。これらの「幸い」のうち、半分はふつう「幸い」であるとは言えない状態のように思われます。とくに最初の「心の貧しい人」は一般的には「心が冷たい」「自分のことしか考えていない」というような人々を表現する言葉です。しかし、この訳は誤解を招きます。本来は「霊において貧しい」という意味であって、霊的、精神的に助けを求めていることを意味します。さらに言うならば、「貧しい」という言葉はお金や財産が少ないことですが、「〇〇が貧しい」というと、悪い意味にとられてしまいます。しかし、本当はいろいろなことに恵まれず、満たされることを求めている状態のことです。そのように考えると、「心の貧しい人」「悲しむ人」「迫害される人」「義に飢え乾く人」は助けを求める人々です。なぜそのような人々が幸いなのかというと、助けを求める声に神が応えてくださるからなのです。

諸聖人の祭日にこの福音が読まれるのは、まさにそのような人々が「聖人」であるということなのでしょう。ところで教会において「聖人」というと「列聖された人」のことを表しますが、広い意味ではわたしたちの信仰の模範となる人のことです。「心の清い人」「平和を実現する人」などはまさにそのような人です。そして「迫害される人」には殉教者や正義を貫くために捕らえられた政治犯のような人が含まれるでしょう。しかし、先に書いたような助けを求める人々はそのほかにもたくさんおられます。苦しみや悲しみから解放されることを求めてイエスの教えを聞きに集まった人々はまさにそういう存在でした。

これらの幸いと言われる人々はまた、イエスの姿を現しています。イエスは人々とともに悲しみ、正義を貫くために迫害され、苦しみを受けられました。「聖人」はイエスの姿をこの世に示す人のことですが、貧しい人や苦しみを受けている人もイエスの姿を示しています。この福音が今日読まれるのは、列聖されていなくてもそのような人々の中にイエスの姿を見つけることを教えているのだと思います。「となりの人間国宝」というテレビ番組のコーナーは、国の無形文化財に指定されていなくても人間国宝にふさわしい人を探して紹介します。わたしにとって、「となりの聖人」はだれでしょうか。　　（柳本神父）